

田口 洋美著

えちごみおもてやまんどき
『新編 越後三面山人記 マタギの自然観に習う』



既に半世紀以上前のことになるが、マタギとかサンカという民俗の紹介が大々的に世に出され、その特異な生業・生活様式と相俟って世間の耳目を集めたことは、未だ記憶に新しいところであろう。

特に三角寛の猟奇的サンカ小説・伝奇ロマンが大流行し、彼はその延長線上の「サンカ社会の研究」で博士号を取ったが、その虚実ないまぜの信憑性が物議をかもした。

一方、マタギに関しては、古くは「北越雪譜」の鈴木牧之、民俗学の柳田國男はじめ、高橋文太郎、宮本常一などによって、まじめな研究がなされている。高橋文太郎はその論考「秋田のマタギ資料」で精緻な実証研究を行っているが、高橋文太郎と言う名前は皆さんもどこかで聞いたことがあるのではなかろうか。左様、彼は明治大学山岳部創設キャプテンの山男でもあった。

私は、50年程前、往時の若者の世界を風靡した秘境物や漂泊物に興味を持つようになった頃、戸川幸夫の「マタギ～狩人の記録～」(昭和37年新潮社刊)を読んでから、マタギ(又鬼、股木、茅に鬼)に興味を持つようになり、折に触れてバラバラと色々な資料を拾い読みしたものだった。また、その頃東北の飯豊山に登りに行った折、下山時にマタギ集落の一つである山形県小国村の長者原集落を見学したりもした。

さて、前置きが長くなった。この本は、マタギ集落として秋田県阿仁集落とともに日本を代表するマタギ集落であった新潟県朝日連峰山中の三面集落(旧新潟県岩船群朝日村三面、現村上市。今は三面ダムの湖底に沈んでしまった深い山中の山里)がダム建設で湖底に沈む前に、その狩猟文化と山村習俗を丹念に採録したルポルタージュである。

マタギ最後の世代が未だ存命な時に、四季折々の山の民の暮らしと狩の様子を彼らの口から直接聞き書きをしたものであり、その朴訥な語り口と独特な方言と相俟って読者があたかもそのムラで暮らしているような気分させてくれる。そののびやかな筆致は一幅の山水画をみているようでもある。

日常の暮らし以外にも、例えば、狩猟対象の動物を絶やさないための“留山”、“スノヤマ”、“サルヤマ”などという猟の作法、土地や森林を疲弊させないための焼畑などの土地利用のやりかた、野生と人為のバランスがとれた生業のサイクル、等々彼らの自然との付き合い方の考証も行われており、また、獲物の平等な分配の仕来りなどにも言及されていて、マタギという社会が如何に自然との共生、集落成員間の融和に腐心していたかを窺わせるに十分である。「山に生かして貰うために、あえて山も人も欲を半分殺す」という古老の言は奥が深い。

マタギ猟は秋田県や新潟県が本場であるが、彼らは獣を追って遠く近畿の山中まで足を延ばしたという。社会生活の変化、動物保護法の普及などによって今は狩猟も行われなくなり、年1回ほど害獣駆除という名目で熊やカモシカなどを狩るだけになっているようだが、世界の各地で“文明の崩壊”が指摘されている現今、彼等マタギ社会が築き上げてきた人と自然と世の中のパワーバランスに思いを馳せてみるのも悪くあるまい。

ヤマケイ文庫 2016年3月刊、950円 (初版は1992年に農山漁村文化協会から刊行された)

(酎)